

大熊狸喜 表紙イラスト:ひなくま

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

近所  
～どっちが上手?～

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『ご近所くノ一 ～どっちが上手?～ 前編 お姉さんたちの床術指南!』  
『ご近所くノ一 ～どっちが上手?～ 後編 幼なじみとの床勝負!』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



近所  
~どっちが上手?~

大熊狸喜  
表紙／ひなくま

## 登場人物紹介

### Characters

さかのうえ ろくたろう

#### 坂ノ上 六太郎

少し内気な、普通の高校に通う少年。実は天然の「イカセ体質」であり、見ただけで何となく女性の性感帯が解ったり、触るだけで強い官能を感じさせてしまう。

はごろも ささめゆき

#### 羽衣 細雪

六太郎の家の右隣に住む忍術羽衣流の本家の末娘。ややおっとり気味で、長髪で爆乳グラマー。忍びの才能は皆無だが、立派なくノーマーズして特訓中。六太郎の事が好き。

いかづち ふうか

#### 雷 風花

六太郎の家の左隣に住む雷忍軍の本家の末娘。ボーイッシュでスレンダーな、細雪の親友。忍びの才能は皆無だが、くノーマーズして特訓中。六太郎の事が好き。

はごろも ほむら

#### 羽衣 炎

細雪の姉で、天才的な床術くノーマーズ。才能のない妹のため、六太郎に妹たちの相手を依頼し、更に床術を指南した爆乳な妖艶美女。

いかづち はざくら

#### 雷 葉桜

風花の姉で、炎と同じく床術天才くノーマーズ。炎と一緒に六太郎の床才能を磨いたクールな美女。炎同様、才能のない妹たちのため思ってくノーマーズへの夢を諦めさせようと考えている。

極めて普通の高校生「坂ノ上六太郎」の家は、両隣がそれぞれ代々続く忍者の本家屋敷という、ちよつと普通でない環境だった。

立派な門構えを誇る右隣の「忍術 羽衣流」と、漆黒の城がそびえる左隣の「雷忍軍」。幼稚園児の頃に引つ越してきて、それぞれの家の、同じ年の少女と幼なじみとなった六太郎。高等科の学生となった現在でも、三人は仲の良い関係だ。

「六太郎くん。はい、お弁当です」

昼休みの校舎屋上で手作りのお弁当を差し出す、羽衣流の末娘「羽衣細雪」は、隣でにつこりと微笑んでいる。

豊かな黒い長髪を風に靡かせ、ノンビリした春の陽だまりを思わせる笑みの少女。

セーラー服の胸は大きく膨らみ、その肢体は魅惑的な起伏に恵まれている。

受け取る少年も、お弁当箱を捧げる左右の細腕で挟まれた乳房に、いつもドキッとさせられていた。

「う、うん…ありがとう」

両掌でお弁当を受ける瞬間、指先同士が触れ合う。

「ん……」

少女はそれだけで、ずいぶん恥ずかしそうに肩を跳ねさせて、頬を染めた。そして少年を挟んだ隣に座る、青いショートカットのスレンダーガール。

華奢というより美しく引き締まった肢体は、少女らしい清潔感で輝いて見える。そんな、雷忍軍の末娘「雷風花」は、幼なじみの愛妻弁当攻撃に、悔しそうだ。

「ぐぐ……おべんと、美味しそう……！」

彩りも綺麗で、人参でできた可愛いウサギなども華やかなデコ弁を、横目でチロリ。幼なじみの言葉に細雪は隙だらけなドヤ顔で微笑み、自分のお弁当を差し出した。

「風花ちゃんも、コンビニのオニギリだけでは栄養が偏ってしまいますよ！」

一品どうぞ、と向けられたお弁当に、コクリと喉を鳴らしながら、ボーイッシュな少女はツンと意地を張る。

「ア、アタシはオニギリが好きなのさっ！」

そして、昼食を終えて教室に戻った三人。

「あ、次の時間は英語だね。今日は六日だから……僕、先生に当てられるかも」

ちよつと予習をしておこうかと席に座ると、前の席に、後ろ向きで風花が腰掛けた。

「六ちゃん予習するの？ だったらあ、ア・タ・シ・が、見てあげるよっ！」

ノートを指す指先が、六太郎の指にツンと触れる。と、ショートカットの乙女はヒクンつと、上気しながら身を震わせる。

「あん……え、えへへ」

そして恥ずかしそうにバツが悪そうに、照れ笑い。

指先などが触れ合うと、まるで穏やかな性甘悩のように頬を染める幼なじみたち。

三人が高等科に進学した頃からの反応で、最初は単に恥ずかしいだけかと思っていた。(これが僕の特異体質によるモノだつて知つたのは、もう半年も前の事なんだよね……)

恥ずかし反応でも上機嫌な風花に対し、お弁当での点差を詰められる黒髪少女だ。

「あうう：私、お勉強はニガ手ですう：」

料理が得意で勉強が不得意な細雪と、成績が良くて料理がニガ手な風花。

幼なじみの少年を争う二人は、実家がそうだから当然くノ一。まだ見習いではあるけれど、その道でもライバル同士だった。

(それにしても、あんまりくノ一らしくないけどね……)

二人に想いを寄せられ、また自らも寄せる六太郎は、毎日の登下校などで忍者少女たちに、結構な目に遭わされていたりする。

「六太郎くん、アブないです〜っ！」

犬に吠えられた少年を護る為、細雪が犬をケムに巻こうと煙玉を破裂させれば、風に乗った煙で六太郎がゲホゲホ咳き込む。

「六ちゃんっ、ハっ！」

カラスのフンから護る為、風花が素早く忍び傘を開くと、中から隠し忍具が雨あられ。(二人が好意で護ってくれているのは嬉しいけど……逆にケガが増えるよね、僕)

一生懸命なのは解っているし、未だ見習いの二人が真面目にくノ一の修行をしているのも、知っている。

でも多分、いや絶対。

(細雪も風花も、くノ一としてはキビしい……んじゃないかな)

と思うものの、日本一の女忍者を真剣に目指している少女たちには、言えない言葉だった。

「それじゃ、また後でね〜」

くノ一たちに護られて帰宅した六太郎は、いつもの如くケガした身体を、ベッドに休める。頬や腕には、治療の痕が。

「大したケガじゃないけど……あははは」

二人が手当てしてくれたハートのバンソーコーも、愛おしく想う。

指先が触れ合うだけで、羞恥に耳まで染める幼なじみたち。

そんな、忍びの者としては著しく疑問符な二人の事を考えながら、少年は半年前の事を思い返していた。

細雪には兄と姉が、風花には二人の姉がいる。羽衣家は長男が、雷家は長女が頭目を継ぎ、忍の里としても安定していた。

そんな、忍者一族の事情とは全く関係ない筈の六太郎の部屋に、ある夜、両家の姉たち



が来訪。

部屋の天井がパカリと開いた時には、目を疑って硬直してしまった。

「わっ、炎さん！」

幼なじみのお姉さんとはいえ、唐突に天井裏から侵入されて、すぐくビツクリ。

「はあい、六太郎ちゃん」

気楽に挨拶をくれた、細雪の姉での羽衣の長女・羽衣炎は、炎を思わせる長い赤髪をポニーテールで纏めたくノ一。

朱い衣装は全体的に布面積が少なく、ムチムチ爆乳も大きく横に溢れ出ており、先端はギリギリで隠されている。

オーバーニーのタイツも、腿に張り付いてパツパツだ。

更に。

「失礼つかまつる」

「は、葉桜さんも!？」

古風な挨拶で、なんと床下から入室してきたのは、風花の姉で雷家の次女・雷葉桜。夜空を連想させる美しい濃紺色の長髪を、サラりと流していた。

スレンダーだけど、バストとヒップは標準以上の、美しいラインを魅せている。

背中が剥き出しという大胆な忍び装束も、艶々の肌を極上に引き立てていた。

「六太郎ちゃん、ちよつとい〜い？」

何やらイタズラっぽい笑顔を魅せながら、二人の美女は床に座る。

「は、はい…っ！」

緊張しながら、少年も正座。

ヒザが触れそうな近距離で向き合うと、女性を知らない若い男子は、何を話して良いのか解らず、頭の中が真っ白になった。

いつの間にもやら六太郎の部屋に通じる秘密の通路ができていた。とか、そんな疑問も浮かばないほど、目の前の美しい二人に意識を奪われてしまう。

（——っい、いけないいけない…!）

視線がバレたら怒られる。そんな事を思って、慌てて視線を逸らす少年。

「あの…：今日は、何か…」

幼なじみだし、登下校時などに挨拶をするから、見慣れた衣装ではある。

しかし自室という狭い空間だと、柔らかい肌が目の前だからか、気持ちちが落ち着いていられなくなる。

しかも二人のお姉さんくノ一について、幼なじみたちに聞かされている事もあつた。

（たしか炎さんたちは、稀代の天才床術使いだとか…）

つまりそれは、セックスの天才。

くノ一デビュー以来、二人合わせて千人以上の男たちを参らせたとか。

そんな、二つ年上の女性と間近では、年頃の少年が冷静でいられる筈がない。妙にセクシーに意識してしまい、心臓もドキドキと高鳴ってくる。

(それに：炎さんの胸とか、葉桜さんの腿とか……すごく、目を惹かれる……)

艶肌にも、露出過多な忍衣装にも目のやり場に困って、つい視線を泳がせてしまう。

六太郎は子供の頃から、二人のお姉さんたちに、弟のように可愛がられている。

そして、純情なモジモジ反応を察しげに眺める二人から、六太郎は思いも寄らない相談を持ちかけられた。

「あのね、六太郎ちゃん。細雪たちの事なんだけどお〜」

妖艶なくノ一お姉さんたちのお話によると、妹たちは真面目に忍びの修行をしているけれど、どうにも才能は皆無だという。

「そこで姉上たち両家の頭目が話し合い、なんとか大ケガをする前に、二人に忍者への道を諦めさせよう。という事になったのだ」

つまり、六太郎には想像できないほど、忍びの道は過酷だという事か。

自身のドジで大変な痛手を負う前に、別の道を目指して貰おう。という、姉たちの愛情なのだ。

「なるほどたしかに——あわわ……そ、それで、僕は何かにお役に立てるんですか？」

当たり前の質問に、二人の美女はイタズラっぽく「うふふ」と微笑む。

「明日ね、二人に条件を出すの。『くノ一として重要な忍術、床術を駆使して、お隣の六太郎ちゃんをメロメロに墮としたら、くノ一デビューさせてあげる』って」

「……っえええ〜っ!?」

つまり、六太郎とセックスをしてイカせれば良し。という事らしい。更に二人は。

「だから六太郎どのには、逆に妹たちをセックスで参らせて欲しい。というお願いさ」  
二人とエッチしろ、という話だけでも、十分驚愕。

なのに、見習いとはいえくノ一である細雪たちに、床術で勝て。と言っているのだ。  
「っっそそっそんなっ——ぼぼ僕っ——っ」

混乱羞恥して慌てる六太郎は、思わず両掌と首をぶんぶん振る。

「おや、六太郎どののは、二人の事が嫌い？」

なんだか楽しそうに追及するお姉さんたち。

美顔を近寄せられると、耳までカーッとさせられて、少年は降参するしかなかった。

「そそ、そんな事は、ありませんけど……」

柔らかい谷間やムッチリした腿の間に視線を奪われて、でも再び、慌てて逸らす。

純な少年に微笑み合う、お姉さんくノ一たち。そして二人の手で、六太郎はベッドに押し倒された。

仰向け少年の胸に、柔らかい爆乳が乗せられる。初めて触れる、タツプリとした双乳の重さで、心臓は更にドッキドキ。

「む、むねっ——っ!？」

（女の人の胸って、こんなに柔らかくて重くて、それに暖かい…!）

そんな事実を、年頃の脳は一瞬で覚え込んでゆく。数秒ほどの間があつて、六太郎の理性は漸く、軽い混乱から戻つてきた。

「ああああの…でも、僕なんか…。」

特別イケメンでもなければ素晴らしい才能もない、普通の男子。

しかし肉体接触してくるお姉さんたちは、数ミリの距離まで唇を近づけて、告げる。

「六太郎ちゃんは、優しくて可愛い子よ。だけどそれだけじゃなくて…:…ん、もしかして気付いていないのかしら？」

「キミはね、『イカセ体質』なのだよ…。」

「い…:…いかせたいしつ…?」

初めて聞く言葉だ。疑問符な少年に、美女二人は濡れた視線を絡ませる。

「そ。数千万人に一人の、特異な体質でね」

「無意識でも、女の子を官能に墮としてしまう…:…まあ、天然テクニシャン、かな…?」

「て、天然てくにしゅん…!？」

そんなすごい体質、普通人の六太郎は聞いた事がない。しかしお姉さんたちは言う。「覚えない？ 例えば、ちょっと触れただけで妹たちが感じてる、とか：うふふ」言われて、高等科に入ってからの変化が頭を過る。指が触れた時の、恥ずかしそうな幼なじみたちの反応。

「で、でもあれは、普通の事だと：わわっ」

更に二人が覆い被さつてくると、心地よい女体の重みで、身動きできなくされる。

「帰宅した風花たちの顔を見れば、間違いないさ。キミは、大っ変な女殺し：くすくす」数センチ先での甘い香りと、暖かい体温。

更に繊細な指で頬を撫でられると、若い生理は、強い興奮しかできなくされてゆく。

そんな羞恥にさえ上気する年下少年は、お姉さんたちにとって堪らない様子。

「お姉さんたち実はねえ：：：ずっと前から、六太郎ちゃんに目をつけていたのよ」

「だからな：：：わたくしたちがキミを、一流の殿方に：し・て・あ・げ・る」  
生まれて初めて、耳元で女性の囁き。

チュっつと優しくキスまでされて「ふっ：」と息を掛けられると、背筋がゾクンと痺れて頬が熱くなった。

「ひうつ——は、葉桜さんっ——わあっ！」

抱き付いたまま、お姉さんたちは忍び装束の胸部分を、するりとはだける。

葉桜の標準的だけど美しい艶微乳が、炎のお餅みたいなたっぷり爆乳が、目の前でプル  
 タプンっと弾んだ。

「おっおっばいっ——すごい…っ！」

人生初の、女性の生乳。ナゼだか「見たら怒られる」とか思ってしまったものの、しかし  
 本能は、視線を釘付けで固定。

艶々の乳輪や桃色の乳首を見せられると、下半身は一気に血を集めて、ズボンがギュウ  
 っとキツくなる。

「あらあら、六太郎ちゃんたら、オッパイだけでこんなにして…正直で可愛いわ」

ジーンズの上から、赤髪くノ一の柔らかい指で男性器をスリリ…と撫で上げられた。

「あうんっ——ほ炎、さん……！」

分厚い生地越しなのに、まるで直に愛撫されたように、ペニスがピリリつと痺れる。  
 意識がさらわれている間に、クールな長髪美女のプルプルリップで、唇が塞がれた。

「まずはキスからだよ…ちゅ」

「——っ!？」

(キっ——キスっ!!)

初めての口づけに、思わず息が止まる。濃紺色なくノ一の薄い唇は、暖かくて蕩けるよ  
 うな、包み込まれる接吻。

アダルトなお姉さんの優しい掌で、情熱的に頭を抱かれると、唇はより深く密着する。

「んん……ちゅぷ……」

数時間のような数秒でキスが離れると、葉桜は微笑みながら優しく指導してくれた。

「……ん……息は鼻からするのさ……それ・じゃ、『雷床術 濡れ絡み』……ちゅぷ」

再びの口づけと同時に、濡れてヌメる舌が口内へ。くノ一の暖かい舌はサリサリヌツリとしていて、まるで別の官能生物のよう。

——ちゅぷりゅ、んむちゅぷちゅんぷ。

歯の裏側や頬の内側など、口粘膜の全てを吸われて、舐めあげられる。

熱舌で口の中が満たされると、意識と思考が蕩かされてゆく。

「んぷ、んくん……はざくりや、ひゃん……」

無意識に名前が漏れると、なんともう一人のくノ一が、軽くヤキモチ。

「あん、六太郎ちゃんたら葉桜ばかり……わ・た・し・も……」

ジジジ……とジッパーを下げられて、ペニスを剥き出しにされる。

（ほ、ほむらさんが……僕のを……！）

幼なじみのお姉さんに勃起を見られて恥ずかしいのに、肉体は官能に硬直したように動けない。

健康的な桃色の男性器は、女性の視線を初めて受けて、ビクッと蠢動する。



「わあ…大きくて立派だわあ…こくん…『羽衣流床術 柔壺の掌』…うふん」  
 プニプニの掌で、フンワリとペニスを包まれた。優しい女性の掌に、初体験の腰全体はギョッと力んでしまう。

触れるか触れないかの絶妙な包まれ方をされた途端、肉棒は焦れたように、愛撫を求めて更に硬化を見せた。

「六太郎ちゃんの…ガマンできないって、真っ赤になってオネダリしてるわ」  
 嬉しそうに双脛を蕩かす炎。更に焦らすようにゆつくりと、桃色勃起への愛撫を施す。

——すりゆしゆる、すりゆりゆりゆ…。

暖かい掌で、根本から先端までを優しく擦られた。

「ほっ、ほむらさっ——んくく…っ！」

肉カリ部分の裏側や本体の弱点を愛撫されると、ピリピリとした微弱で鋭い性感に、腰の奥から全身が駆け抜けられる。

腹筋や背中やお尻が力み、肉体は勝手に腰を突き出す。

「うふふ、こんなに喜んでくれて…お姉さんとっても嬉しいわ」

赤髪くノ一は、幼い弟をあやす姉そのままの、優しくて楽しそうな笑顔を魅せていた。

「わたくしも、ほうら…ちゅんぶ、ちゅ…」

妖しく微笑む、くノ一美女たち。

魅惑的な二人にキスと愛撫をされては、心臓は嘗てないほどドッキドキと高鳴って、全身も顔も熱血で熱くなる。

舌キスとペニス愛撫で責められ、追い詰められる童貞少年。肉体は早く快感が欲しくされて、どうやってもガマンなんてできない。

(すごく、いいい…早く、出したいっ！)

「どう、六太郎ちゃん…：…んん…：とても気持ち、いいでしょ…？」

年下少年の快感を容易く見抜く、天才お姉さんたち。それでも美女たちの頬は、官能に紅葉を浮かせてもいた。

「あふ…：わたくしたちまで、ドキドキさせられてしまう…：これが『イカセ体質』…：すごいな、六太郎どのは」

余裕と愛情の微笑みが、熱っぽさを隠せずにいる。少年の忍耐する姿にも、喜びを感じているのだろうか。

——んちゅぷ、れろん…：すりしゆりり…。

キス攻撃で理性が舐め蕩かされて、ペニス愛撫で肉体が頂点を求めさせられる。

二人の美女くノ一の、天才的な床術で責められて、勃起は飢餓感でビクビクと震え、先端からは透明な液がトプリと溢れた。

「こんなに真っ赤になって…：…すぐに、いっっぱい…：出してあげるわね」

嬉しそうに微笑みながら、炎は仰向けの少年に跨がる。艶めく腰を突き出しながら、くノ一仕様の極薄な、朱いふんどしをずらす。

(——っ!!)

年若い童貞男子の本能は、女性器の姿をハッキリと捉えていた。

「ほ、ほむらさんの……!!」

名前を表すかのような、朱く充血した濡れる処。色も形も綺麗で、でも情熱的にも見える性粘膜は、六太郎の視線を受けてヒクんとわななく。

「わたくしのも、見せてあげよう……」

そう言った葉桜は大きなお尻を向けると、同じく極薄で細い、水色の下着を下ろした。炎に比べて肉の部分が薄く、しかし柔らかいシワを魅せる濡れ粘膜。更にやっぱり初めて見た、色素の薄い女性の後孔。

「お尻……は初めて、見ました……!!」

「あん……キミの視線だけで、全身が熱くなるよ……」

小さく窄まったそこは、言葉通りにキュッと収縮を見せた。

二人の果蜜の香りは、ペニスに力をくれるような、乳酸系のホロ甘い芳香。

もう肉棒は、裏側を見せる程ガチガチに反り返り、少年の理性もガマンができない。

「こんなに堅くなって……六太郎ちゃん、どうしたいの……?」

掌愛撫で責めるお姉さんが、イジワルな質問をしてきた。

「どうって……その……」

答は一つしかないけど、恥ずかしくて言えない。そんな男子は、天才くノ一によって更に追い詰められた。

「今は正直に、自分の欲求に従うのよ……」

「そうすれば、わたくしたち二人で……ね」

リードする炎と葉桜だけど、僅かに汗を魅せていて、熱と湿りを感じさせている。

——早く女の人と、セックスがしたい！

若い情熱に理性が負けて、少年は素直に白状させられた。

「ぼぼくっ——し、したいです……っ！」

幼なじみのお姉さんに告げると、頬がカアッ熱くなる。

そして二人の愛撫美女は、弟みたいな少年の羞恥姿に、最上のご褒美をくれた。

「いい子よ……それじゃ……」

堅い勃起の先端に、赤髮美女の濡れた媚裂が充てられる。その行為に、濃紺髪のかくノ一が異議を申し立てた。

「ああ、六太郎どのの初めてを……！」

「いいじゃない。葉桜はファーストキスを貰ったんだから」

ちよつとフクれて異議を却下。

そして六太郎は、初めて女性を体験した。

熱い膣孔に鈴口が触れる。丸いお尻が下ろされると、柔らかい膣壁へと、勃起が飲み込まれ始めた。

「あん…こんなに、堅いなんて…」

——つぷつぷ…ちゅむるぷ…。

(ぼ、僕と、炎さんが…！)

初めてのセックス。目の前で女性の中へと飲み込まれてゆく勃起が、なんだか別人のものみたいなの、ちよつと不思議な感覚だ。

それでも、挿入の一ミリ一ミリで恥蜜と熱と襲々が、ハッキリと感じられる。

高いカリ部分が埋められて、太い本体が埋没すると、更に根本まで完全挿入された。

「お腹が…うん…いっぱいだわ…うふふ」

額に恥汗を魅せながら、炎は嬉しそうに見下ろしている。結合の様子を見守る葉桜も、こくと喉を鳴らしていた。

飲み込まれた肉茎は、柔らかな締め付けで襲愛撫を施される。

「ぐんんっ…ほ、ほむらさんの中…すぐく、締められて…きもちいい…っ！」

「そうでしょう、うふふ…」

余裕を見せるように微笑むと、くノ一お姉さんは女尻を上下させ始めた。

最初はゆっくり。そして次第に、速度が上がる。

——つぶちゅぷ、りゅぷぷ：つぶちゅぷつりゅむちゆるぷちゅぷつぷつ！

「はっううっ——し、しぼられてっ：！」

キュっキユムつと本体を締められながら、襞々の膣壁で表面を撫で上げられて、すり下ろされる。

亀頭の割れ目を拡げられるように根本まで擦られたら、次の瞬間には皮膚薄いカリ裏部分を捲られるように撫で愛撫。

「お、女の人の、中って：ヌルヌルしてて暖かくて：不思議な感覚、です……」

そんな言葉が、思わず漏れていた。

初体験を導いてくれたお姉さんは、嬉しそうな妖艶な笑みを返してくれる。

「ん……そしてこれが：『羽衣流床術 溜飲の壺』よ」

言った途端、膣壁はまるで溜飲する食道を思わせるように蠢いた。濡れて、みゆくみゆく吸い上げるような締め付け責め。

天才くノ一は少年の反応を見ながら、更に膣粘膜で、性感帯を確実に淫責めしてくる。

さんざん焦らされた初体験。ペニスには、数回のストロークだけで、絶頂付近まで追い詰められてしまった。

「っほっ、ほむらさんっ——ぼくっ、もうガマンっ——くあううう……!!」  
濡れ粘膜で絞られる勃起全体が、ピリピリと焦れ痺れる。腰の奥がギユギユつと力み、放出への力が溜められてゆく。

耳の奥は血流音で遮られて、理性を排除した肉体は、快感以外、何も欲しくない。  
「ああんっ……わたしがリード、してるのにい……」

イカセ体質の影響なのか、騎乗位の美女は瞼も眉も、トロんと蕩け始めている。  
汗浮く美尻がより抽送を早めると、ペニスは更なる濡れ締め付けでの愛撫を施された。  
——づゅぷちゆるるぷっ、づぶづゅぷちゆりゅぷっ!

「す、すごひ気持ちいいっ——あああああああつ——っ!」  
熱と柔褻のフンワリ抱き留めと、吸い上げるような強い締め付け。

弱点を性感責めにされる肉勃起から、腰の奥へ、更に背筋から全身、脳へと、射精の欲求が高められてゆく。

少年の上では、幼なじみのお姉さんが大胆に開脚して、お尻を上下。

双つの爆乳は自身の頬を隠すほど大きく弾んで、微細な汗をキラキラと散らす。  
自分は今、女の人とセックスをしている。

そんな事実が、官能として実感された。

鼓動は限界まで高まり、射精に向かって、熱血が肉竿を一段と巨大化。

「うふふ、可愛い六太郎ちゃん……わたしの中に、ん……出して、いいわよ……」  
 （——っ中っ！）

蕩けるような吐息で、魅惑的な言葉を囁かれる。その途端、六太郎の腰が快感の引き金を絞られた。

「ぼぼくが……中出しっ……！」

意識が白く灼きあげられて、肉体に溜められた力が、悦楽の中で解き放たれる。そして、全てが絶頂へ。

「ほっほむらさんっ——っ!!」

お姉さんの名前を呼びながら、少年は初体験の放出をした。

——っびゆるるるるるるるるるるるっ、びゅくくくっびゆるるるるっ！

肉壁に包まれながらの射精は、想像すらできないほどの、解放快感。

射精で蠢動する肉勃起は、更に根本から先端へと、襲愛撫で絞り上げられる。

「ままだ出ますうっ——あっあっあっ！」

恥ずかしい告白をしながら、六太郎は終わらない放出快感と絶頂の中を彷徨った。

そして子宮内に放精される天才くノ一も、快感で寄せた爆乳の先端を硬化させて、肢体をプルッと震わせた。

「あふ、はうん……とっつても、熱いわ」



気怠い息の、朱い官能くノ一。胎内射精の脈動をタップリと堪能すると、汗濡れる女腰を持ち上げた。

ペニスが抜かれる瞬間、引き締まった下腹がヒクつと震えたのが印象的だ。

「さ、次はわたくしと…だよ…」

炎が女を教えると、葉桜は両掌で少年の頬を取りつつ、ヒザ立ちにさせる。

濃紺髪のお姉さんは、蜜と精が液垂れのように艶めく肉勃起へと、濡れた視線をくれた。

「キミがこんなに、立派な姿になるとはな…ちゅ」

右の頬に優しいキスをくれると、白いお尻を突き出した四つん這いになる。そして六太郎の腰前面に、大きな女尻を密着。

「今度は違う体位で、女を知るといい」

「は、はい、葉桜さん…！」

目の前のヒップは、横と後ろにタップリと発達した大人の巨美尻。

まるで、大きなパン生地に卵白を塗ったみたいにつるつるで、ぱつんと張りもある。

ムッチムちなお尻頬の谷間では、ピンク色の菊肛が愛液で濡れて、艶めいていた。

炎に取られた両の掌で、背後から女尻の左右をガッシと掴む。

そして葉桜の掌でペニスを導かれると、六太郎は濃い桃色の柔壺に、自ら挿入した。

——つつぶっ！

今度は風花の処女を突き通しながら、細雪の粘膜に同質の痛感。

二度の破瓜を体験させられた幼なじみたちは、痛みと驚きと疑問符で、また目を白黒させていた。

清纯を捧げた二人の処女窟孔は、それぞれ綺麗な喪失血を流している。

「あうう……ろ、ろくたろう、くん……」

上気しながら潤む視線の二人に、少年は告げた。

「風花、細雪。僕たちは三人一緒に、初体験したんだよ」

「三人、一緒に……?」

まだ「?」の二人に、六太郎は断言。

「二人の床術奉仕を覚えて、僕なりに応用してみたんだよ。やり方はナイショ。名付けて

『六太郎オリジナル床術 三人一緒』!」

「三人……」

「一緒……」

そんな少年の言葉に、二人は安堵の笑みを浮かべていた。

「うん……アタヒたち……」

「一緒れふ……うふふ……」

「細雪、風花……それじゃ、行くよ」



更にそのまま納得させてしまおうと、六太郎は指と勃起の抽送を開始。

ペニスはボーイッシュな幼なじみに挿入中だから、おっとり少女には肉芽と膣孔と菊門の三カ所を同時責め。

——つぶぶ……ちゅぶつぶぶ……。

「ろくちゃんっ……やんひゃっ！」

最初はゆっくりとした抜き差しで。そして二人の性感を少しずつ高めて、痛みを遠退かせながら、腰を早める。

「うあん……んんっ……はっあんんんっ……！」

——つぶぶ……ぬりゅぶぶ……つぶぶりゅぶちゅぶっ、くちゅりゅちゅぬる……！

熱い肉を深く突き込まれると、初めての充足感で風花の美脚がプルプルと震える。

「っ——はふんっ——おなかっ……はあぁっ——みちみちでいっぱいひい……っ！」

対して三カ所への指刺激を施される細雪も、肉体の性感を高められて、熱い官能に黒髪を乱した。

「っんあぁあっ——ろくう、たるふくんっ——ゆびひっ、くちゅくちゅひて……っ！」

細雪の膣内に差し込んだ少年の指には、粒の多い濡れ膣壁が、拙くチュウチュウと吸い付く。

ペニスを突き込んだ風花の濡れ柔壺では、襲々の熱粘膜で恐る恐ると抱き締められて、

しかし感謝と服従を示すような締め付け愛撫を施された。

「んん：風花も細雪も、すごく締まる：！」

指と男性器が熱蜜にまみれ、それぞれが六太郎に愛情を捧げようと、熱く脈動。

肉棒と指での同時性感が全身で混ざり合つて、腰の奥で射精の力へと変わつてゆく。

「ろっ、ろくちゃんがいっぱひっ——アタヒのおくっ、ズンズンひてるうううっ！」

子宮壁をノックすると、最奥での強い快感で、風花の膣壁がより活性化する。

ペニスに気持ちよくなつてもらおうと、襲々が増して更に本体を愛撫した。

「あんあんっ、ひやあああっ——わたくひもっ——はああああっ——おなかもっおひりもふっ——っあっひれふううううっ！」

羞恥箇所の全てを快感責めにされながら、細雪は丸いお尻を震わせている。

膣壁を優しく強くかき回す指が、ヌルヌルの粘膜できゅむつと強く締め付けられた。

濡れ柔筒は、初めての挿入性感で粒が増えて、愛しい男性の指を一生懸命に吸着奉仕。

「ろく、たるふちゃんっ——わた、わたくひいっ——あっあっああんっ！」

「はやあああっんっ——おくが、ラメになっやふよううっ！」

いままでの床勝負で肢体を開発されてきた事も手伝つて、風花も細雪も眼差しと言葉が性感に蕩けている。

少年の肉責めに、初体験の見習いくノ一たちは、あつという間に絶頂近くへと追い上げ

られてしまっていた。

少年のイカセ体質によって、二人は粘膜全体を愛撫されながら更に最奥まで突かれていますという、ほとんど同じ性感を得ている。

愛らしい二人の幼なじみを平等に愛するために、六太郎は再び素早く、ペニスと指を入れ替える。

一瞬の空疎感すら与えず、風花の三カ所を指責めしながら、細雪の子宮まで貫入。

「ひゃんんっ——アソコっあつひいっ——っあうっ——っ！」

「つつよくっ——っおくまれへっ——っろくたる、くんれっ——いばひいっ——っ！」  
 タップリの蜜を溢れさせながら、勃起突きされる女体たちは、細いウエストや豊かな女尻をくねらせて挿入に耐える。

ボーイッシュくノ一の大きなお尻が震えて汗を纏い、黒髪少女の大きな乳房がタプンと大きく揺れた。

滑らかな肢体は汗を纏って妖艶に艶めき、ツルツルの肌を伝って流れる。

幼なじみたちの眉根は「八」に蕩けて、初めて体験する「挿入で絶頂快感へと追い詰められる」不安感で、身を寄せ合っていた。

「ろくたるふつくんっ——っわたくひっ——もふううっ！」

肉の抽送に耐える引き締まった下腹部が、汗を纏ってプルプルと震える。

「あたまが、ラメええええええつ——つはひつズンズンつ——つろくちゃんんんつ——っ！」

開脚させた腿が弱々しく痙攣をして、内股までもが羞恥と性感で紅葉に染まる。

「うん。可愛い二人を、イカせてあげるよ」

そう告げると、喜びを隠さない幼なじみたちの眉が、更に六太郎を求めるように、弱々しく蕩けた。

「「ろ、ろくたろつ——さまはあぁつ！」」

いつも通り、絶頂を与えてもらう二人は少年への感謝と敗北の証として、無意識でも様付けになる。

汗にまみれる幼なじみたちの肢体が、更に飢餓感で灼かれ始めると、少年は腰と指遊びの速度を上げた。

——つつぷりゆりゆつ、ぷちゆくちゆりゆぬるつ、ちゆつぷりゆるりゆつ、つぶつぶつぷちゆつ！

同時に、勃起と指を入れ替えながら、二人の女体を悦楽へと追いつけてゆく。

更に、絶頂に向かつて新たな刺激を与えるため、肢体の性感をコントロール。

「あつあつあつ——ろく、たろふちゃんつ——かきまわひちゃんつ、ラメへええつ！」

「アアタヒもふつ——ひゃうふうつ——おなかのおくつ、ずんずんするよふうつ……！」

ペニスを受け入れる風花には肉棒でしか味わえない充足感を与えて、細雪には指でしか味わえない三点同時の愛撫を施す。

(二人とも、感じてるぞ……！)

突き込みと指刺激を十数回ほど数えたら、素早く入れ替えて休みなく刺激。

黒髪少女の粒々な濡れ膺の、奥深くまでペニスを突き込む。

「ひややややっ——ろくたる、くふうんっ——ふとひのっ、すごひれふううっ！」  
同時に、ショートカット少女の髣髴々膺壁を強く優しく、指でかき回す。

「いつ、いいよふうっ——六ひやんの、ゆびひっ——蕩けひやううう……っ！」  
強く弱く、深く浅くと勃起で突いて、差し込んだ指を媚振動させながら肉芽と肛門を転がし突く。

繰り返しながら、十数回ごとに、でもランダムに、勃起と指を入れ替える。

それぞれでしか味わえない性の快感を与えると、二人の乳首はキュっつと硬化。

更に肉芽が痙攣をして、もう絶頂以外なにも求められないと、素直に告げていた。

肉責めされる二人は、震える肢体で弱々しく抱き合いながら、蕩けた瞳で素直に快感を告げ続ける。

「ろ六ひやんっ——ひやあああっ——おくでズンズンっ——つもうらめへええ……っ！」  
「わた、わたくひもうっ、グリグっ——やああああんっ——グイグイされへっ、あたま

うっ、おかひくなひやひまふううっ！」

肢体は官能で脱力して、言葉も眼差しもトロトロ状態。

なのに、濡れる膣壁は更に吸い付きと締め付けを強くして、熱肉同士の密着感を高めてゆく。

褻も粒も際だつて、締め付けられる勃起は肌全ての弱点を責められ続けていた。

指とペニスがキムリユムとキツく抱き締められて、腰の奥では射精への力が溜められてゆく。

(もう、僕も…！)

もう二人が敗北宣言をしたから、六太郎も安心して快感を甘受できる。

少年は幼なじみたちの絶頂と自らの射精に向かって、突き込みと指抽送の速度を更に上げた。

——つづぷゆりゆぶつぢゆぷりゆづゆぷちゆぶつ、ぬぷりゆつちゆちぷちぷちぶつ！

二人の肉体性感を、また同じように、挿入と指振動が混ざった同一快感に操る。

腰は深く浅くとリズムミカルに突いて、膣壁を上下左右に満遍なくペニス擦り。

「あくふっ、はくうううあああああああつ——おらかのなかあつ、めひやくひや蕩けひやつ——とろけひやひまふうううっ…！」

指振動も強くしながら、濡れ壺内では二本の指を開いて性粘膜を刺激。



「なかつなかでアバレちやつ、やあああああつ——つアタ、アタヒあたまつ——あた  
まラメになひやうからあああああつ！」

処女のままイカセ体質で開発されて、本来は感覚の鈍い膣壁内まで、性感帯にされてい  
る少女たち。

暴れる熱亀頭に、かき回す指に、肢体は完全に脱力。意識も既に、快感で蕩けている。  
床勝負を挑んで純潔を捧げた見習いくノ一たちは、もう六太郎にイカせてもらうこと以  
外、考える事すらできなかつた。

早く絶頂が欲しいと、二人の熱褻は指と勃起肉を抱き奉仕して、性感帯を健気に愛撫。  
(二人のアソコ：すぐく、縮めてくる：！)

差し込んだ指を熱いヌルヌルで締め付けられていると「膣壁に挿入している」と、あら  
ためて実感されて、エロティックな気分が高まってゆく。

腰を引く度にキュウウつと吸われ、勃起を突き込む度にフワリと包まれる。

肉体が、快楽の頂点を求める本能的な飢餓感だけで、支配されてゆく。

粒々と褻々のキツイ粘膜締め付けを受ける指と牡肉からは、一突きごとに、腰の奥での  
放出の圧が高められていった。

主導権を完全に掌握している少年の肉体は、幼なじみたちの女体絶頂とともに、射精へ  
向かって上昇してゆく。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**